



從容録に学ぶ (五七)

第九五則 臨濟一画

〔示衆〕

衆に示して云く、仏來るも也た打し、魔來るも也た打す。理あるも三十、理なきも三十。爲復是れ錯つて怨讐を認むるか、爲復是れ良善を分かたざるか。試みに道つて看よ！

〔本則〕

挙ぐ、臨濟院主に問う、「甚麼処より來る？」(掌して云く、這裏より來る。)主云く、「州中にて黄米を糶り來る。」(却つて実頭。)濟云く、糶得尽すや？。(草に入つて人を求む。)主云く、糶り尽せり。(両塔すれども廻頭かず。)濟、拄杖を以て一を画いて云く、還た這箇を糶得るや？。(甚の死急かあらん。)主、便ち喝す。(蝦蟇が叫く。)濟、便ち打つ。(伏手い骨擦だ。)次に典座至れば、前話を挙ぐ。(小売は弄な。)座云く、「院

主は和尚の意を会せざらん。(口は是れ禍の門。)濟云く、「爾、また作麼生？」身上に上り來れり。(座、便ち礼拜す。(転堪えざるを見る。)濟、また打つ。(手快さを趣ねた。)

ことし、二〇一六年は臨濟禪師の示寂一一五〇年忌であり、これを期して臨濟宗ではさまざまな記念行事が行われていきます。唐末の禅匠、臨濟義玄禪師の機縁は『從容録』では四則あり、うち二則はすでに学びましたので、今年に残る二則をとりあげましょう。

まず、臨濟伝をさつとおさらい。山東省の生まれで、黄檗の三〇棒で大悟し嗣法。のちに鎮州(河北省石家庄)臨濟院に住して活発な禅風を掲げました。その語録『臨濟録』は禅録中白眉の名著です。じつは、この「臨濟一画」の機縁も『臨濟録』「勘弁」が出典です。本機縁の眼目を先取りしていえば、院主と典座の力量の高さと、そ



臨濟一畫

れをおごらせぬ臨濟の賞棒とでもいえましようか。

まず万松さんによる「示衆」の意識です。仏だろろうと悪魔だろろうと打ちのめす。

道理に契つた者も外れた者も三〇棒。こんな仕打ちを、間違つて憎くての棒打とみるか、また単にモノの分別がつかぬ暴行とみるか。さあ、誰か正しく答えてみな？」およそこんなところでしようか。むつかしいですね。でも、「本則」を正しく読んで理解すれば大丈夫です。これも意識します。

臨済が寺の監院に聞いた。「どこに行ってきたね？」「ご城下で玄米を売りに。」「みんな売りつくしたかね？」「売りつくしました。」そこで臨済は挂杖を手に「一」字を書き、「これも売れるかな？」監院は大声を発した。すると臨済が監院を打った。そこへ典座和尚がやって来たので、臨済がこれを話した。典座「監院さんは先生の心を会得しなかったのですね。」「そんならお前さんはどうだね？」典座は礼拝した。臨済はまた典座を打った。

こんなところでしようか。つぎに、難字をみておきます。院主〓禅道場の役職名で事務長・監院。「売尽す」は心中無一物の意。一画は空間に一字を画くこと。這箇〓本来売買できない仏性。「打つ」は賞棒であり誠めで

はない。「喝」〓大声を発することで、「カーツ」というのではない。典座〓禅道場で食事を司る役職名。三〇棒は臨済伝の故事から。

また、本則の一句ごとにつけられる万松のコメントは、実に歯切れがよく、かつ味わい深いですね。総体的には、臨済・院主・典座のそれぞれに対して批判的で、これは宗風の



唐代建立の臨済塔(河北省石家庄市)

相違からでしようか。特に臨済に対しては、空に画いた一字が売れるかとの問いに、なぜそう「死急」〓ムキになるんだ、とか、喝を蛙声にたとえたり、典座に話したのを「小売弄」〓ひけらかしはやめろ、など辛辣ですね。ただし、臨済禪師の偉さやスゴさは別格ですから、ひよっとすると万松はあえて反措定の

に戯語を弄しているのかもしれない。

じじつ、院主が実際の売却米にかけて己の無一物を表現しているのは相当の力量。それを認めた臨済の空一字に対し、一喝で仏性を丸出しにした。典座の場合はやや劣り、院主が空一字の本旨を会得できないとみた。人ごとではないといわれて、会得の礼拝。そこで院主と同じ賞棒を頂戴したのです。

宗師家が修道者の力量をみきわめるはたらきを「勘弁」といいます。『臨済録』には「勘弁」の項にそんな機縁が豊かに存在し、棒打は沢山みられます。こんにち、棒打といえはすぐに暴力やイジメが連想されますが、禅門の歴史では珍しくないばかりか、おほめの賞棒さえあるのですね。

ふりかえって、私は若いころ警策を誤用したお恥しい経験があります。坐禅中に笑い出した方を、何度も強打したことです。笑うのもたしかに不謹慎ですが、他に止めさせる手段はいくらでもあったはず。それを感情的になつた己の未熟さを思うと、慚愧の念に駆られます。賞棒とは正に天地懸隔。当山で罰策を用いず、自己請求の場合のみとしたのは、そんな恥しき体験の反省と無縁ではありません。

記念事業の概要固まる

昭和四十六年七月二五日(日)に龍泉院参禅会が発足してから今年で四五年目を迎えます。昨年一月に小畑代表幹事から四五周年実行委員として一四名が任命されました。

一月の定例参禅会後に第一回四五周年実行委員会が開催され、次の五つの記念事業と実行委員が決まりました。

- 一 寺宝展 岡本、武田、牧野、山本、河本、坂牧
- 二、講演会 杉浦、添田、小畑(二)
- 三、在家得度式 中罵、小山、鈴木
- 四、東北旅行 松井、相澤、坂牧
- 五、記念出版 五十嵐、清水

さらに、今年一月の定例参禅会後に第二回四五周年実行委員会が開催され、各行事の日程、場所などが次のように決まりました。

- 一、寺宝展 一〇月三〇日(日) ～ 十一月六日(日) 於：龍泉院
- 二、講演会 寺宝展開催期間中に開催 於：

- 龍泉院
- 三、在家得度式 五月一日(日) 於：龍泉院

- 四、東北旅行 一〇月中旬
- 五、記念出版 寺宝展までに出版

寺宝展では龍泉院に所蔵されている什宝の中から御老師が百四点選び、展示されます。講演会では禅に関する講演と仏教美術に関する講演を企画しています。

在家得度式の思金については、新しく得度を受けられる方は二万円、再度得度を受け絡子を希望される方は一万五千円、再度得度を受け、絡子を希望しない方は五千円となりました。

各行事の詳細については、今後、実行委員会で検討し、具体化したものから参禅会などでお知らせいたします。積極的にご参加下さるようお願い致します。

坐禅普及委の報告

坐禅普及員会の具体的な活動が早くも始まりました。その状況を報告します。

- ①名称は「東葛坐禅クラブ」
自治体等に対して宗教色を薄めるために

「東葛坐禅クラブ」という対外的な名称を設けました。

②ポスターを制作

新たに東葛坐禅クラブのポスターを制作しました。A2サイズで印刷し、A4サイズのチラシも印刷しました。

③自治体などへの働きかけ

普及委員会の委員は所在地の自治体関連部署や大学などへポスターやチラシ、それに御老師が作成された「坐禅体験のおすすめ」を持って訪れることにしました。柏地区は松井さんと五十嵐さん、我孫子地区は清水さんと小畑(二)さんと刑部さん、白井地区は佐藤さん、流山地区は中罵さんが担当となりました。

④柏市市民公益活動団体に登録

東葛坐禅クラブの公共性を高めるために、柏市の市民公益活動団体に登録することに致しました。

榎戸さんが作成してくださった会則案を坐禅普及委員会に諮り、若干修正した上で、他の書類と併せて柏市に提出しました。その結果、一〇月二八日に柏市から登録決定通知者が届きました。

柏市に公益活動団体登録することにより、

柏市民交流センターを優先的に利用することができず。さらに公益性が高まることにより、公共団体からの協力も得やすくなります。

一〇名が参加、法話に感銘

第五回坐禅体験会の報告

平成二八年一月一日、イカスミ（テニス愛好会）の方々一〇名（男性が五名、女性が五名）が参加され、第五回坐禅体験会が開かれました。その概要を報告します。

今回は五十嵐坐禅普及委員会副委員長が直接、参加を申し込みました。一三時四〇分に開始し、まず四〇分説明、坐禅を二〇分行いました。七名が普通の坐禅、三名が椅子坐禅でした。次いで、御老師が三〇分、熱心に話されました。内容は次の通りです。

坐禅堂は聖域

このお寺の山門に「参禅道場」の看板が掛かっている。道場には二種類がある。一つは僧の修行道場で、これは全国に三〇ある。もう一つは一般の人のための参禅道場で全国に三〇〇ある。

四年前に参禅道場を建てた。小さいながらも本格的な坐禅堂で、坐禅をする人のみが入る資格があり、聖域である。ここは曹洞宗宗務庁から参禅道場の認可を受けた。

山門の入口に「人の道は心にあり、その心は行いにあり」という文が貼ってある。その心坐禅の時にどう処理したか。いろいろなことが頭に浮かんでくるが、浮かんできても追いかけてはいけない。

日本文化の底辺には「道」という考えがある。行うことによって心の鍛錬になる。道を求めることは心の鍛錬である。

江戸時代初めの臨済禅の高僧、沢庵和尚が心をどうすべきかということに対し、「心全体を放ちおきなさい」と言っている。金剛經の「応無所住 而生其心」も同じ教えである。

道元禪師は「仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり」と言われたが、これは世界、宇宙のいぶきと自己がひとつになることである。

沢庵和尚の「心こそ心迷わす心なり、心に心、心ゆるすな」と言う歌を詠んだのを紹介して、法話を終わりたい。

多かった「良い体験」との声

この後、参加者全員が大幅に時間を延長し、五〇分間座談会を行った。刑部リーダーが司会、一六時に体験会を終了した。

参加者からおおむね次のような感想があった。

- ① 坐禅の時間二〇分は短く感じた。静かであった。
- ② 坐禅は初めてだった。途中で足がつってしまった。何にも考えないことを考えてしまった。
- ③ 初めての経験だった。足が痛くなった。警策は気持ち良かった。両肩してもらった。
- ④ 初めての、無になることは難しい。唾液を飲み込むと音がしないか心配だった。
- ⑤ 初めての、途中、身体がきつくなった。時間を感じなくなった。
- ⑥ 椅子で坐禅をしたので、足の痛みもなく、集中できた。何も考えなくて坐禅ができた。
- ⑦ 初めての、心を無にするのは大変。緊張もしたし、膝も痛くなり、大変だった。
- ⑧ 家の宗派は浄土真宗で五歳ころまで、祖母と念仏を唱えさせられた。坐禅は禅の何なのか。

坐禅に来たい人が七人

最後に参加一〇名にアンケートを取った
ら、次のような回答があった。

- ① 坐禅経験の有無 〇初めてが一〇名
- ② 時間 〇ちょうどよい七名、短く感じた二名、長く感じた一名
- ③ 足の痛み 〇痛かった五名、少し痛かった三名、痛くなかった二名
- ④ 坐禅の説明 〇よく分かった九名、まあまあ分かった一名
- ⑤ 法話 〇理解できた七名、少し理解できた二名、あまり理解できなかった一名
- ⑥ 今後、坐禅会にきてみたいと思うか 〇思う七名、分らない三名
- ⑦ 年齢 〇五〇代一名、六〇代六名、七〇代三名
- ⑧ 住所 〇我孫子市六名、柏市二名、松戸市二名
- ⑨ 他に次のような感想もあった。
 - ・ 御老師のお話しが大変よかった
 - ・ 椅子でも坐禅が出来ることを広く知らせた方がよい。とてもよい経験になった。
 - ・ 今日に参加させていただき、ありがとうございます。

第三三三回成道会

御老師、峨山禪師について解説



御老師と打ち合わせをする会員

二月六日第三三三回成道会が行われまして。成道会はお釈迦様が覚りを開かれた事を記念して仏教寺院では広く行わ

一般家庭に生まれ育った優婆塞、優婆夷には慣れない所作の連続ですが、そこは椎名老師と小畑代表幹事による慈悲ある「アイコンタクト」によって無事に円成しました。

成道会で御老師の法話はいつも、名僧・傑僧についてですが、今回は今年六五〇回遠忌の峨山禪師について次のように解説されました。昨年秋、峨山禪師の大遠忌が行われました。曹洞宗を興隆したのは瑩山禪師といわれていますが、実際は總持寺第二世住職峨山禪師です。

峨山禪師は一一歳で密教寺院に入り、二二歳の時、京都で当時、大乘寺首座だった瑩山禪師と会い、自身が学んでいる天台の教学と禪の違いについて瑩山禪師に問答を挑みました。しかし、瑩山禪師はにっこり笑って何も答えませんでした。

この出会いが峨山禪師に強烈な印象を残し、ついに老母への思いを振り切り、瑩山禪師に入門しました。禪宗第六祖慧能禪師が老いた母を置いて出家した故事を瑩山禪師から聞かれ「私情を捨てても」と思われたからです。

瑩山禪師から「月は一つではなく二つある」という公案を示されましたが、答えられず、さらに修行、二年後、瑩山禪師が指をピンとはじいたのを聞き、大悟しました。

その後、大乘寺に留まらず日本中を行脚して修行、瑩山禪師が開山した永光寺ようこうじで都寺つうじとなり、やがて住職となりました。

その後、瑩山禪師の後を継いで總持寺の住職も兼ねました。ちなみに、總持とは「善を勧め悪を懲らしめる」という意味です。

毎日、約五〇キロ離れた總持寺と永光寺の間を往復されていたとの伝承もあります。四二年間住職を務められ、数多くの弟子を育て、曹洞宗の末寺は一万八〇〇〇にもなったと言われています。九二歳で遷化されました。

龍泉院単独で初の托鉢

六万七四九〇円を朝日に寄贈

昨年（二〇一五年）一月二〇日、後御老師と龍泉院参禅会会員による托鉢が「歳末助け合い」という形で行われました。名称は坐禅の普及を図るため、「東葛坐禅クラブ」になりました。

年末の托鉢は前回までは第二教区で行っていましたが、それが行われなくなったため、龍泉院だけの托鉢になりました。参加者は御老師を含め一七名でした。

当日は午後一二時半に長全寺に集合、全員で般若心経を唱えたあと「歳末助け合い托鉢、東葛坐禅クラブ」のノボリを先頭に、柏駅東口のサンサン広場まで列を組んで行進し、到着後、四組に分かれ、午後一時から三時まで托鉢を行いました。

喜捨してくれた方はお年寄りと子供が多く、若者はなかなかしてくれません。それでも六万七四九〇円と前回の第二教区で行った托鉢の約二倍になりました。全額を朝日新聞厚生文化事業団に寄付、それが朝日新聞にも掲載されました。

終了後は「うどん市」で温かいうどんを御馳走になりました。これは参禅会が支出した



柏駅前での托鉢行

もので、もちろん、寄付金には手を付けていません。幸い、小春日和でお釈迦様のご加護があったのかもしれない。

思いをみんなが吐露

新年会、和気藹々と開催

「うどん市」で二月一日（木）、恒例の新年会が開かれ、午後二時から三時間ほど楽しい時を過ごしました。参加者は二一名。刑部さんが司会、「アマダで金賞一、銀賞六が御老師から贈呈されます」と述べると、「賞品の本数を先に決められた、出さざるをえなかった」と御老師が述べられ、会場は笑いに包まれました。

酔いが回ったところ刑部さんから「参禅会への考え方など述べて欲しい」といわれ、各自、思い思いに発言しました。みなさんの発言を発言順ではなく書きました。だが、どのような発言をしたか、御想像下さい。

・内村鑑三の本で後世に残す最大の遺物は一に金、二に事業、三に思想だが、四番目に「高尚なる生涯（いきざま）」だと書いてあった。本当の自分に目覚めることが仏性に目覚めて生きることでないか。鉄砲は外に向かっていて、仏性は内に向かっていて。回光返照とはそのことではないだろうか。

・一番大きいのは作務。そういう時間を頂けるはありがたい。坐禅もよいが、作務は健康になり、お寺がきれいになり、飽きない。自然とともに生きるのは素晴らしい。みなさん作務に参加しましょう。

・退職後、このままでよいのだろうか、と思っていた時に「まあ坐ろうか」というチラシを見て参加した。もっと早くチラシをみれば良かった。生活にメリハリができた。これからも長く続けたい。

・坐つても「悟りとはなにか」全く分からない。分からないうちに〇〇年が過ぎた。これからは唯識などを勉強したい。

・参禅会に参加して〇〇年、時間が短く、だらしない弟子だった。参加のきっかけは母が亡くなったことだ。たまたま永平寺に行った翌日、参禅会に参加した。町内活動など忙しいが、これからも参禅会を基準にがんばりたい。

・〇〇年に参加した。小麦粉の袋をうどん市でもらい、竹の子を入れたら白くなったのが楽しい思い出。高間さんのお父さんから「ちり紙も積もれば厚くなる」との言葉を聞いた。「継続は力」と思っががんばりたい。また、食事作法についても勉強したい。

・若い人を増やさなければならぬと思う



御老師と鍋を囲んで

ではないか。

・仕事のコンサルタントは考えることだが、坐禅はなにも考えないことで、ややとまどっている。一人前を目指して頑張りたい。

・天皇陛下が七週連続日帰りで東北の被災地を訪ねられた。計画停電の時、皇居も電気を止めた。「電気を付けたら」と側近がいったら、陛下が「厚着をすればよい」といわれたのを聞いて尊崇の念を持った。美智子皇后との仲も良く、理想のご夫婦だと感じた。

・古い人が参禅会をやめている、それも年番幹事もなさった方もだ。小畑代表幹事がそういう方にも案内状を出されている。そういう方をひっぱり出すよう、普及委員会でアイデアを出したらどうか。参加者を増やすよう企画して欲しい。

が、入ってきた方に続けて貰うことも大切だ。なじめない人もいる。「成道会に参加しませんか」といった一声を掛けることが効果があるの

が、入ってきた方に続けて貰うことも大切だ。なじめない人もいる。「成道会に参加しませんか」といった一声を掛けることが効果があるの

・〇〇年前から、御老師に「いらっしやい」といわれていた。会社はやめたが、週日は会社の事務所に一人で住み、土日は船橋の自宅に帰っている。ご縁をいただいたので、皆様の後ろからついていきたい。

・坐禅には全く興味がなかった女房が写経をするようになった。こんなにうれしいことはない。次男が病気で、家をどうするかで頭を悩ましている。昨年は忙しきにかまけてあまり参加出来なかったが、今年はずり続けたい。

・参禅二〇年で揮毫をいただき、部屋に飾っている。四五周年を記念、秋に東北旅行を計画しているが、思い出のページになるよう努力したい。

・最初、作務から参加した。話すのが苦手だが、自分をつめる坐禅の呼吸で話せばよいと教わり、そうするよう務めている。会社を辞め、ウツ状況になりかかっていたが、生きるような方向に考え方が変わってきた。みなさんの迷惑にならないよう頑張りたい。

・出会いが人生で一番大切だ。出会いしかない。企業でも人に助けられた。人生も自分ではなく人に助けられて全う出来た。いま、参禅会で素晴らしい人との出会いがある。そのエキスをいただきたい。

・テニスをやっているが、最近、球が止まって見えるようになった。球さえ見ていけばよいと感じた。「心をとどめるな。心は自然に埋まってくる」と一月一〇日御老師にいわれた。坐禅の時は坐禅に、酒を飲む時は酒に向かいあうことが大切だ。

・年目だが、小畑さんに坐り方、五十嵐さんに「坐禅堂は修行の場なのでしゃべるな」と教わった。いまあるのは先輩の方々の助力によると思っている。

・息子が病気になるたのがきつかけだ。マール経をしていたが、ソ連の崩壊でショックを受け、近経を学んだら先輩から非難された。そのころ御老師から「人と比べるのは自分を大切にしないからだ。もっと自分を大事にしろ」といわれ、ハッと気づいた。もっと若い人が参加するよう工夫すべきだろう。

・二、三日前、秩父の廣見寺の寺報をみた。ここでは「七色（の虹）の特徴がある」と言っていたが、龍泉院にも七つある。第一は「坐禅堂を持つ参禅道場」であり、稲荷堂、百観音、妙見菩薩などだ。これらを広く知ってもらいたい

なお、アミダでは小畑二郎さんが金賞を射止め、猿の像をいただきました。

涅槃会、精進についてお話

二月一五日午後二時から涅槃会が行われました。梅華講の講員による御詠歌の後、御老師が涅槃会の法語を読み上げられ、続いて、般若心経と舍利礼文を三度誦し、その後、御老師より、佛遺教経に委説されている八大人覺の教えのうち、第六番目の精進について次のようなお話がありました。

精進とは良いことをコツコツと続けて行くことである。しかも、勤修無間の精進でなければならぬ。精進という観点から冠婚葬祭は子供の情操教育上、大事な行事である。子供は行事に参じると色々と疑問を持つ。「どうしてお焼香をするの」、「何故お数珠を持っているの」、「亡くなった人はどこで何をしているの」など。だが親御さんはこれらについて全く知らないので答えることができない。

子供からの疑問が分らなければ、一緒に考え勉強すればよい。考えることにより、生きている意味を考えることになる。子供に正しい宗教的な考えを何時でも触れさせるようにすることが、間断なく良いことをすることであり、精進とはそういうことなのである。

什宝 一 達磨大師像

ダルマさん知らない人はいませぬ。実在の人物は、六世紀の末ごろインドから中国に禅を伝えたボダイダルマという高僧です。その伝記も伝説に包まれています。嵩山少林寺で面壁九年の坐禅をしたといわれています。

唐の時代にはダルマさんが禅宗の開祖として崇められ、今日に至っています。そこで日本の禅宗寺院では、かならず本堂内にダルマさんのお像を祀るようになりました。

龍泉院では向って須弥壇の左側に安置し、右の大権さんと相対しています。これは禅寺の典型的な祀りかたです。イスに掛けた坐禅像で、大きなドングリ眼ながら優しさをたたえ、親しみを感じさせます。

江戸時代の初期から中期ごろの製作、つまり今から三百年以上前のお像と考えられます。禅宗寺院のシンボルでもあります。



達磨大師像

歳末助け合い運動

鎌ヶ谷市 小山 齋

左前方から親子が手をつないで歩いてくる。母親が女の子に何か話している。女の子はにっこりと微笑みながら母親を見上げる。母親が財布から何がしかの銭を取り出し、子供に手渡した。その間、数秒、数歩であった。私の前に近づいてきた。膝をついて、女の子と目と目を合わせた。女の子はにっこりと笑顔で「ハイ」といって募金箱に入れてくれた。「ありがとう」といいながら頭を軽くなげると、はにかんで笑顔を浮かべながら小走りに母親の元に走りより、何か話をしている。心が熱くなり、目頭が熱くなった。手足は冷たいけれど満足感にひたっている。菩提薩埵四摂法の瞬間だった。

師走の柏駅前、龍泉院参禅会の歳末助け合募金活動が例年通り行われた。

昨年までは東葛地区の行事として幾つかの寺院が合同で行ったが、今回は龍泉院単独の活動だった。

昨年の小生の収穫は金銭的にはゼロに等しかった。この不景気な時節、坊さんだろうと、おばさんだろうとボーイスカウト、ガールスカウトだろうと誰がやっても実入りは少ない。そんなご時勢なのだ。しかし、托鉢として大きな意味を感じた。

坐禅では、無^がが強調されるが、托鉢も無なのかもしれない。坐禅修行と同じだ。寒空の中、仲間が集い、慈善事業として欲得無し^の行である。心静かにお願いするが、人の行き来する、動^の環境では、一瞬一瞬に心が動く。

近づいてくる人に、この人は入れてくれるのではないかと多少の期待を込めて、歳末助け合い運動にご協力下さい^と声を掛ける。反応なし。先様にも先様の事情があり、当方は当方で形だけに終始し、心からのお願いが先様に伝わらない原因を反省しない安易さ^がやるせない。

しかし、今年はその女の子と布施、愛語、利行、同事を実践できた^と受け止めた。

近くのうどん屋でうどんを肴に少しの酒を飲む。まもなく一年が終わり、新たな一年が始まる。日々、悔いの少ない朝を過ごしたいものだ。

合掌

道路許可申請

松戸市 小畑 節朗

平成二十七年から参禅会独自で托鉢を行う事となった。街頭で人様からお金を頂くと言う募金活動には警察の許可が必要とのことで、柏警察署に向かった。

聞くと、それは交通課所管であると言う。早速、窓口に向くと、先ず「道路使用許可申請書」を提出の上許可を得るとの事、見ると申請書には使用目的・場所（地図添付）・日時・方法・形態・添付書類・現場責任者氏名を記入のうえ申請すべしとのことである。

行政の立場からすると、道路を使用するのは水道工事も、街頭行事も、募金活動も、道路を使用することでは変わりはない言うことである。

ついでには、募金を行うことを決定した旨と募金の寄託先を明記せよとの指導を受けた。実施は申請後五日目、手数料二二〇〇円、許可条件は「公序良俗に反しないで行え」との事である。

托鉢は古来より修行の一つの形との考えの一方、現代の辻立托鉢は募金活動で社会貢献をすると言う考えが主流だと感じた。

第三三回成道会の円成

松戸市 徳山 浩

昨年一二月六日、梅花講と共同開催の第三十三回成道会が、差定にしたがい、厳粛かつ盛大にとり行われました。

私が参禅のために上山を許されたのは、昭和五八年の早春の頃でした。同年一二月四日が第一回目の成道会で、御老師のとり計らいで近くのお寺の住職、副住職様、三名の随喜僧のお世話をいただきました。会員の出席は二〇数名だったと思います。「雲堂」で坐禅をし、配役もすべて会員で行っている現状からみると、時代の差を感じます。

無事、三三回目の成道会を迎えることができた私にとっては、只々「仏縁に感謝」あるのみ。御老師はじめ会員皆様方のご支援に対し、厚くお礼申し上げます。

今年も参禅会四五周年に当たり、いろいろな計画が進められているようです。四〇周年の大事業だった「雲堂」についても、各方面で話題にのぼっており、飛躍の年になることは間違いありません。運営面等でも大きな仕事になることでしょう。

辛うじて米寿を終えた者にとっては、たい

したお手伝いも適わず、申し訳なく思っておりますが、これからも「仏向上の世界」を目指し、精進して参りたいと思っております。御老師はじめ、会員皆様の今まで以上の励まし、ご支援を切にお願い申し上げます。合掌

参禅会二〇年の回顧

柏市 松井 隆

第三三回成道会において、椎名老師から力のこもった揮毫を頂戴しました。早いもので龍泉院での坐禅を初めて二〇年になります。揮毫は「他非吾」で、『典座教訓』における天童山での道元さんが「あなたは炎天下でそんなに椎茸を干すなど高齢にもかかわらずなげやるのですか」と問うた時の老典座の答えが「他是非吾」であります。

当時、二三歳で中国に渡った道元さんは、「この仕事は私がやらなくてだれがやるのか」と老典座からの答えに接し、その時、典座の仕事の大切なことが分かったようであると、昨年老師からいただいた『典座教訓の滴』に細かく記されています。

そこで、私の二〇年を振り返ってみますと、入会は、平成七年の暮れ頃だと思えますが、

坐禅の先輩添田さんから「龍泉院の坐禅はなかなか良いぞ」と言われ、五月の連休には「中国禅門五山巡礼の旅が予定されているよ」と誘われ、どちらかといえば中国の旅の方に魅力を感じて、参禅会の入会に繋がったようです。

一方、坐禅は体験するも、結跏趺坐がなかなか組めず、足のしびれと妄想噴出とで、とても無相の坐禅にはならなかったように記憶しています。

やはり、この時の中国五山巡礼の旅が「仏教東漸」のコンセプトであり、このことが私の深層部分に感動を与えて頂いたように感じました。何とその後、八回にわたって中国仏教伝来に纏わる旅に繋がりが、さらに、その先のガンダーラからインド仏跡巡りまでも行き着くことになりました。

このころの私は、五〇代後半でしたので、今よりは体力に恵まれており、百名山完登に挑戦していました。会社でも単身赴任を二度経験し、そろそろ定年を迎えるに当り、これからのライフプランをどうしようか、我が女房殿にも相談したりしていました。そのような中で、坐禅会に入会し「仏教伝来」に纏わる旅などで私の人生には、多大な充実感を与

えて頂いたのです。

そして、会社での単身赴任で少し鍛えた料理の腕を、中国の天童寺典座さんとの出会いからか、参禅会の典座にもトライすることになりました。今思えば、この旅での縁が、典座に繋がったようです。平成一〇年の成道会が最初のトライだったようで、単身赴任での自炊体験から「飯ぐらいは炊けるぞ」と、浅はかな考えで取り組みました。修行の皆さんの「美味しかったよ」との一言があり、これまで続けられたように思います。

その後、小山さんが典座に加わって下さいました。小山さんはなかなかの腕利き。趣向豊かな新メニューにはいろいろな美味を加味していただき、好評を博しています。また、多くの方からの添菜も頂き、最近では、岡本さん自らが豊かに栽培された野菜を提供するなど、会員の皆様の心使いにより龍泉院での典座文化が育ってきたように思われます。

小山さんとは、平成二一年の降誕会だったと思いますが、椎名老師との会話で作務の了解を得、植木道場がこの年五月からスタートしました。勿論、指導者は長年にわたってお庭を守り、育て上げてこられた椎名老師であります。私は退職後にただ何となく、通信教

育で何冊かのテキストを読んだ程度、どこかで実習したいと思っていた矢先で、本当に良い機会を頂きました。

椎名老師の「論より実践」の機会を得て、もう七年続いたことになりました。平日だけの作務ですが、体にとっても良いように思います。一〇時に老師に入れて頂くお茶がとても美味しいです。また、お墓参りの檀家さんからは、「ご苦労様です」と声をかけられ、励みにもなっているのです。

特筆すべきは、坐禅堂の建設に関することです。詳しくは、明珠四九号に記されていますが、今思うと、檀家の染谷巨志さんと、坐禅会の皆さんとの強いチーム力によって完成できた充実感と喜びです。

このように、坐禅を始めての二〇年は、あっと思う間に過ぎました。いろんな体験に大変満足しております。老体に鞭打つてもう少し頑張りたいと思ってもいます。



松井さんから揮毫の額を受け取る御老師

椎名老師と坐禅会会員の皆様のご健康を祈り、二〇年の回顧といたします。

合掌

思考力を磨く

取手市 三町 勲

私たちは日々新聞を読んだり、本を読んだり、他人と会話をしたりして勉強した積りがあります。しかし、そこから未来を創造する知恵は備わっているでしょうか。つまり、その中で最初から最後まで残るもの、私たちの知恵へと変化してゆく思考技法が身についているのでしょうか？

「当たり前を疑う」、「探究する」、「知識と知識をつなげる」などの思考技法で、単なる知ることではなく、千変万化の中で使える智慧を持っているであろうか？

残念ながら、私たちは過去の教育過程の中で知識は学んできましたが、思考技法は学んでいません。勉強といえ、只、知識を積み上げるのみでした。

禅は突き詰めて思考するものです。

所謂、真実を見極める修行である筈です。われわれの「ため坐禅」は本来の坐禅とはかけ離れたものです。こんな坐禅に数年もの歳月を費やしていたのではないのでしょうか。

先頃、ネルケ無方（安泰寺の住職）の講演

を聞き、師が言われる「日本人に仏教はいらない」という提言に全く自分の脳をたたき割られたような、脅威を感じました。

その根底には知識積み上げ式教育がありません。物事を基本から考えていない体質が出来上がっています。

日本人は正月には神社に初詣し、結婚式は教会で行い、葬式は僧侶にお経をあげてもらおうという、欧米人からすると何と不思議な宗教観を持った人々だろうと思われています。

仏教は釈尊を崇拜していますが、釈尊は神ではありません。釈尊は「悟りを開いた」ブツタです。われわれもブツタになれます」というのが仏教です。

曹洞宗の禅を取ってみますと、道元禪師は、「坐禅だけでなく、日常生活も大事である」と説いています。日々の一挙手一投足に「仏性」が宿るとされたのです。

この日常生活の実践を通して、人とのつながりを大切にし、自然と共生する生き方を無意識に実践しているのです。

一方、一般には、他宗教に対しても寛容であり、仏教と神道とキリスト教が共存して、日本社会に同居しているのです。

「日本に宗教はいらない」といわれる真意はそこにあります。日常生活の中に仏教や神道の教えが根付いていたので、日本人は宗教に無関心だったのではないのでしょうか。

ネルケ無方住職の次の提言もあります。

大切なのは中身—きらびやかな神社・仏閣ではなく、中身があれば修行はできる。

他者とシンクロする日本人—日本人は時間に正確であり、相手にシンクロできるから、相手にもそれを期待する。

日本の神社数はコンビニの四倍—寺社数は十六万二千、コンビニは四万店舗である。この点では日本は無宗教ではないといえる。

カビが生えたと無常を感じる—仏教には、「一切皆苦」、「諸行無常」、「諸法無我」、「涅槃寂靜」の四法印が定着している。日本は四季があり、災害が多いことにもよる。欧米では災害があっても、日本のように無常観を感じない。想定外という概念もない。

私たちは、もう一度、自分自身の考え方や日常生活の慣例を根本的に見直してみる必要があるのではないのでしょうか。それには思考技法を磨くことが大切です。

合掌

感謝の『民生委員』

坐禅体験記

柏市 杉浦上太郎

私は平成二六年一二月、西原民児協所属(二三名構成)の民生委員になりました。

ボランティア的要素が高い仕事は敬遠される世相とあって、町会役員同様、民生委員もなかなか手がないのが現状で、民生委員を受けた人々は様々です。

多忙の合間を縫って行われる西原民児協の「泊研修旅行」は、毎年秋に行われるのが習わしです。

私は、平成二六年一二月に初めて参加しました。バスに乗車した途端、缶ビールが配られ、目的地に着くまで呑みっぱなし。おまけに、途中で研修として立ち寄った先がビール工場ときた。二日目も同様で、まことにすさまじいアルコール漬けの二日間でした。これは研修旅行という名を借りた慰安旅行だ！というのが率直な感想でありました。

そんな思いが影響したのか、平成二七年度の泊研修旅行の実行委員長に私が指名されることになりました。『慰安旅行』の反動も

あつて、本当の研修旅行にしようと思つて、先づ三つの柱をもとにプランをたてることにしました。

①研修の目的として、「民生委員の心境を高める」ことを明確にする。

②様々な価値観をもつメンバー全員の共通項を見出し、効果的なプランとする。

③結果として、ストレスの解消、見聞を広め、友情を高めることに資する。

検討の結果「心を耕す旅」をコンセプトとしました。具体的には、龍泉院様で法話を聴き、坐禅を体験し、上山田温泉の湯につかり、長野県にある高野辰之記念館で唱歌を唄うということに決めました。

坐禅については、メンバー全員が経験してないので、月例会議の後に、一、二度指導を試みました。いまひとつ反応が鈍かったのですが一月一日、一七名が来山しました。

先ず椎名老師の法話です。その趣旨は、正法眼蔵の中から「菩提薩埵四摂法」の巻をとり上げられ、「民生委員は『自未得度先度他』自分より先にまず他人を悟りの世界に度す」という菩薩の精神が大切である。『布施』『愛語』『利行』『同事』の修行によってその力が備わる。」ということを分かりやすく説

かれました。法話拝聴中、次第にメンバーの顔つきが変わってくるのを感じました。

次は坐禅体験。当初は時間の関係もあつて、「ごく短時間でさわりだけ」とお願いしておりました。しかし、坐禅堂の中で中嶋さんの

迫力ある説明を聞いているうち、俄然、全員が体験意欲が高まってきたのを感じとり、「この機を逃してはいけない、後のスケジュールへの影響は無視しよう！」と決断し、急遽、体験指導をお願いすることに切り替えました。坐禅指導の方々には、大変ご迷惑をおかけしましたが、お陰様でメンバー全員が坐禅体験を、まさに「初心の坐禅」としたものと思われまふ。

最後には、ありがたくも珠玉の書籍を椎名老師、小畑代表幹事様から頂戴しました。最高の対応をしてくださった椎名老師、参禅会会員各位に心から感謝申し上げます。

初日の成果が二日目にも続き、長野県中野市の高野辰之記念館で合唱した「故郷」、「紅葉」に、また新たな感激を加えました。

メンバー全員が、今研修旅行の意義を体得いただいたと思ひ、当初、願っていた目的が達成できたものと自負いたしております。

今後は、折角植えていただいたこの、仏の

種々を、当地域でスクスク育て、ご恩に報いたいもの願つてやみません。

忝くも有難く

柏市 高間 治基

尊崇する椎名先生から、過去三十年、何回かに渡つて幾つかの書物を拝領した。その一つが修証義の全文が載っている経文である。平素、佛縁の節目ごとに一方ならぬお世話に預かつているにも拘らず、少しく距離があいたご縁であつたように思う。

家業の関係で実家兼仕事場で、平日は起居し、家内とは別居状態にある。しかし、彼女も仏教系の学校で学びその影響をかなり受けている真に有難い存在である。従つて、住居は船橋市と旧沼南町泉の片隅にある。さらには有難いことに椎名先生のお膝元という地縁も手伝つて、親しくお側によらせて頂ける環境に恵まれたと言える昨今である。

工場の終業時とともに自由時間がたっぷりとれる状況となり、父の遺産である書籍巡りにその時間を充て、母の遺産である神道の書籍に触れる事も多くなつた。父は鉾山が専門で、小生は哲学を学び、先代の前から事業を

営んでいるものの、商才には程遠く、今でも経済的にはさっぱりである。

先代の反省記によると、自己の欲得で拡大した事業は、その上を行く強欲の仕入れ業者に乗っ取られた形となったが、後援者のおかげで再生させて頂いたという。その後、代替わりして今日に至っている。

彼の関係業者は既に無い。小生は事あるごとに先代に似ていると言われるが、最近は何しろ善かったかなと思える心境に至った。この類稀な環境に在って、現在、最も手強い書物が、曹洞宗檀信徒日課禮誦法 経本である。一度通読するだけで疲労感をおぼえるが、行間あるいは一文字の持つ意味に念いを廻らしていると深夜の時間が過ぎ去ってゆく。ボウツとして前方を見るときも無しに見ながら自分を眺めている、空っぽになっっている、これは坐禅の世界ではないか？と思うに至った。

随分前から「参禅会にいらっしやい」と、先生からお招きを頂きながら、遠慮尻込みし、踏み切れなかった小生を参加させて頂く機会を与えてくれたのは、近くの他人であった。知己を誘って初参加させて頂いたのは平成二七年の一〇月定例会。一月は孫の五歳祝いと重複し、

家内の一言で「はいはい」と会場の人となったが、少々、心中忸怩たるものが残った。

初参加の帰り道、船橋の我が家近くの友人を送り届けた後、自宅に着くやどつと寝込んだ。豪い疲労を覚えたのだった。心地よい熟睡から目覚めた翌朝、すぐに第二の住い兼任事場に向かった。

ということ、取り敢えず、ご法縁を頂き二回目、師走の参禅会に参加させて頂いた。恐縮しつつも不遜にも初心者の小生が自分に理解し易い様にと、自分勝手に修証義を普段着の言葉で書き換えた拙文に、先生は暮のご多忙の中、貴重な時間を割いて校正して下さい、格別のご指導を賜ったことは無上の喜びである。

また、清掃後に頂いたお雑煮の美味しかったこと。またご指導を賜りたいと・先生奥様先達各位にも感謝。 合掌

「花あかりの人」

我孫子市 清水 秀男

「花あかり」という言葉があるんだ。一輪の花をそっと部屋に添えるだけで部屋中がパッと明るくなるよね。このことと同じように、その人がそこにいただけでまわりが

そっと明るくなるような、そういう坊さんになつてもらいたい」

これは、ある僧侶が尊敬する和尚から遺言として贈られた印象的な言葉です。

「花あかり」とは、俳句の春の季語であり、本来は、満開の桜で、闇の中でもあたりがほのかに明るく感ぜられることを意味します。しかし、桜に限らず、すべての花には周囲を明るく変える力があり、私自身今まで、あまたの花によって心が癒され、潤い、安らぎ、命の輝きを感じ、元気を貰った経験が数多くあります。

「花あかりの人」というのは、まさにその様な魅力的な力を持った人の事を指すのだと思います。

例えば、一芸に秀いでた人をみると、共通して謙虚さがあり、内からじみ出る人格の輝きと明るさと温かさがあります。それは姿のみならず、表情、声、立ち居振る舞いすべてに感じられます。

その人には、それまでに到る紆余曲折の苦難の峠を、一步一步越えて来た人生の歩みのすべてが深く人格に刻みこまれています。そして、道はまだまだ遠しという求道の意識が常に人ではないでしょうか。

一芸に秀でた人でなくても、昔おとなしく目立たなかった幼馴染に何十年振りに会い、にこやかで、気品に満ち、美しく老いた姿に接した時、皺の一本一本に刻みこまれた、その友の歩んで来たであろう人生の深さに感銘を受ける事があります。

順風の時は短く、むしろ辛く・苦しく・悲しく、厳しい寒風が、吹きすさぶ時が数多くあったと思われます。その様な時には、その友はじつと耐えながらしつかりと命の根を深く内に張りめぐらしていたのではないでしょうか。そして、それらの経験が成長の糧として、今、美しい花を咲かせ、周りをほのかに明るく照らしてしているのだと思います。

まさに「この泥があればこそ咲く白蓮華」です。

今年、私は七三歳を迎えます。身体の方は老いと共に着実に衰えています。無形の財産である心の力は一生高める事が可能だと思っています。

人生の本領は未来に在りです。年頭に当たって、「花あかりの人」に一步でも近づける様、自分なりの命の花を咲かせるべく、精進してまいりたいと、あらためて心に誓っております。

〈ただいるだけで〉(相田みつを)

「あなたがそこに／ただいるだけで／その場の空気があかるくなる／

あなたがそこに／ただいるだけで／みんなのところがやすらぐ／

そんな／あなたにわたしも／なりたい」

この詩の「あなた」は、まさに私の理想とする「花あかりの人」です。

以上

新年番幹事の抱負

記念行事も支援

我孫子市 刑部一郎

平成二八年度の年番幹事を担当することになりました。今年には参禅会四五周年にあたり、五つの記念行事が計画され、参禅会にとっても重要な年度でもあります。

微力な私には荷が重過ぎると辞退しましたが、小畑代表の強い要請で引き受けることといたしました。通常の参禅会の運営と同時に記念行事実行委員会にも協力し、記念行事も成功するように支援して行きたいと思いま

す。全力でがんばりますので、皆様のご支援を賜りたく、よろしくお願いいたします。

実のある一年に

白井市 佐藤 修平

参禅会の諸役も若い人を起用とのことで、参加してまだ三年弱の私に声がかかりました。なるほど「セリーグの監督」は皆四十代と一気に若返りました。とは言え、私も昨年末で六七歳です。賀状に「行雲流水」、「日日是好日」と記して新年を迎えました。四年目の参禅会活動を幹事としての役目を果たしつつ実のある年にしたいと考えています。蛇足ながら、「自由禅」での坐禅が実に清々しいものであると知りました。

合掌



新幹事 小林裕次さんの竹細工

沼南雜記

【定例参禅会・年間行事】

(一)内は座談の司会者

平成二七年

- 九月二七日 三〇名 (山本 聡氏)
- 一〇月二五日 三五名 (富沢 日出夫氏)
- 一二月二日 三四名

龍泉院参禅会簡介

【参禅】

一、定例参禅会

・日時 毎月第四日曜九時(初参加者は八時半) 来山、正午解散

・坐禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順

(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)

・講義 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱

・座談 自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅

・日時 毎月第一日曜と第二土曜九時から正午まで

・坐禅 九時から一時まで(入退堂自由)

・作務 一時から正午まで坐禅堂掃除

※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一夜接心 本年は六月四、五日、一泊し七炷の坐禅と提唱等

一、成道会 本年は二月四日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

一、他の行事 涅槃会(二月一五日)、花祭り(四月八日)、施食会

(八月一六日)手伝い、歳末煤払い(一二月例会後)

一、作務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

一、『明珠』(四月八日と一〇月五日発行)

一、『口宣』(年一回)

【ウェブサイト】<http://www.ryusenin.org/> 『明珠』『口宣』

のバックナンバーがご覧になれます

(清水 秀男氏)

● 二月六日 二六名

● 成道会

● 二月二〇日 一六名

● 歳末助け合い托鉢

● 二月二七日 二九名

(小畑 二郎氏)

平成二八年

● 一月二四日 三五名

(山本 聡氏)

● 二月一日 二二名

● 新年会

● 二月一五日 一三名

● 涅槃会

● 二月二八日 三四名

(杉浦上太郎氏)

【自由参禅】

● 九月 六日(一〇名)、二日(六名)

● 一〇月 四日(六名)、一〇日(五名)

● 一一月 一日(四名)、一四日(六名)

● 一二月 二日(七名)

● 一月 九日(六名)

● 二月 七日(八名)、三日(九名)

【奉仕作務】

● 九月 四日(三名)、六日(二〇名)

● 雨天につき中止

● 一〇月 二日(三名)、一〇日(五名)

● 雨天につき中止

● 一一月 六日(五名)、二四日(六名)、

二〇日(六名)

● 一二月 四日(四名)、二日(七名)、

一八日(四名)

一月 九日(六名)、一五日(五名)、
二月 五日(六名)、一三日(九名)、
一 九日(五名)

【坐禅普及委員会】

● 九月二七日(九名)、

一〇月二五日(一〇名)

【記念行事委員会】

● 一一月二二日(一〇名)

● 二月二八日(一一名)

▼二月の終りごろ、不覚にもB型インフルエンザに感染してしまいました。「明珠」が発行されるころはインフルエンザの流行も影をひそめつつあるとは思いますが、皆様もお気を付けてください。

(智聰)

▼明珠の編集をお引き受けして約二年。「どうしたら多くの方に読んでいただけるか」毎回、腐心しています。新年会の記事は、そのための試みですが、さて、成功しましたかどうか。

(岡本)

▼暖冬だと言われていた今年も龍泉院の庭に霜が立ち、雲堂に添って植えられた龍の髭も朝露に濡れて瑠璃色の実が光っていた。晩秋に手を入れたアジサイはどんな花を咲かせてくれるだろう。楽しみにしています。

(健治)

●発行/天徳山龍泉院 千葉 県 柏 市 泉 81
●印刷/東港出版印刷株式会社 目黒区中目黒1-8-8
●電話/04(7191)1609
●FAX/03(5724)7302